

カントにおける自然の客観的合目的性について

滝 上 勉

一

カントは数学的自然科学の先天性 (Apriorität) が論理的認識論的な意味で経験——自然——に先行することを明らかにするいわゆる超越論的観念論によって「われわれが自然と呼ぶところの現象における秩序と合法則性とは、われわれが自ら自然のなかへ持ち込んだものである。もしわれわれがこれを自分のうちに有し或はわれわれの心の自然を現象としての自然のなかへ、根源的に入れて置かなかつたならば、われわれはその秩序も合法則性も自然のなかに見出すことはできないであろう」^①ということを主張する。すなわちわれわれ人間のうちに自然の根拠を認め、人間が自然の立法者として、「自然を強要して理性の問いに答えさせる」^②ものであると考えるのである。カントによれば、自然の可能性は経験の可能性であり、自然の合法則性が自然科学を基礎づけているのである。「可能的経験一般のア priori な制約はまた同時に経験の対象を可能ならしめる制約でもある」^③。経験の可能性の制約は自然の可能性の制約である。ところで経験の可能性のア・プリアリな制約はわれわれ人間の悟性にある。そうであれば、自然の合法則性も

われわれのうちに存することになる。したがって経験が可能であれば自然の合法則性も可能となる。自然の合法則性は経験の可能性の制約によって導き出すことができるのである。

「すべての可能的知覚、したがっておよそ経験的に意識される一切のもの——換言すれば自然のすべての現象はその結合に関してカテゴリー (Kategorie 範疇) にしたがわなければならない。要するに自然へ単に自然一般と見なされた⁴は、自然 (natura formaliter spectata) の必然的合法則性の根源的根拠としてのカテゴリーに依存している。しかし空間及び時間における現象の合法則性としての自然一般の基礎をなす多くの法則を単なるカテゴリーによって現象にア・プリオリに指定することは純粹悟性能力のなしうところではない。個々の特殊な自然法則は経験的に規定された現象に関するものであるから、自然一般の基礎をなすところの法則即ち普遍的自然法則にしたがうものではある。がしかしこの法則から完全に導き出されることはできない。一般にこれらの特殊な自然法則を知るためには、さらに経験がこれに加わらなければならない^④」。特殊な自然法則を知るために必要となる経験とは一体いかなる経験であろうか。可能的経験によって自然の法則が可能であるとするならば、さらに加えられる経験とは何であろうか。

特殊な自然法則に対するものは自然一般としての自然の普遍的必然的法則である^⑤。そして普遍的自然法則に相應する経験は経験一般であり、特殊な自然法則に應ずる経験は個々の特殊な経験である。この二つの経験の関係は如何にあるであろうか。論理的にすなわち単に思惟の形式からみると経験一般の可能性の制約はいわば経験の可能的根拠である。この意味では経験一般は特殊なる経験を包摂 (Subsumtion) しているように思われる。もしそうであれば経

験一般の可能性の制約は悟性の機能すなわちカテゴリーによるものであるから、特殊な自然法則はすべてカテゴリーに従属することになるであろう。しかし、経験―経験的認識は思惟と直観・悟性と感性、形式と内容との結合協調によって成り立つというのがカントの主張であり、どちらか一方を欠いても経験の成立は不可能なのである。論理的のみ見られた自然は「形式から見られた自然」(natura formaliter spectata)であり、それに対しては「内容から見られた自然」(natura materialiter spectata)が考えられなくてはならない。経験一般は、まず直観によってわれわれに対象が与えられる。その与えられた対象を内容として悟性は思惟の形式すなわちカテゴリーによって秩序づける、ここに成立するのであるが、この場合、直観は個々の具体的な経験的直観―特殊―ではなくて、直観の形式としての空間、時間である。したがってそれによって成立する経験は当然形式的な経験であることは明らかである。それに対して特殊な経験は具体的な経験として、むしろ「根本経験」Grunderfahrung^⑥とも考えられる。何故ならば、時間空間は純粹直観として具体的な経験から抽出(abstrahieren)^⑦されたものであり、しかも個々の特殊な自然法則もそこから導き出されるのである。したがって、その意味から特殊なる経験は形式と内容の結合した経験であるということができる。そして、むしろこの特殊な経験が論理的には形式的な経験一般に先行するといえることができるであろう。そうであれば特殊な経験は根源的なものとして、特殊な自然法則を知るために、さらに加えられなければならない。いところの経験であると考えられる。特殊な経験は特殊な知覚すなわち個々の具体的な感覚による経験であり、人間の有限性すなわち受容性(Rezeptivität)を示すものである。それは認識に普遍妥当性を与えるために重視された形式からみた自然に比較して、より内容に視点が移された自然である。カントが「純粹理性批判」において取り扱った自

然は経験一般としての自然すなわち形式的にみた自然の問題であったのである。経験一般の理論的説明——純粹理性批判——によっては特殊の経験を含めた経験全体を基礎づけることは不可能であることは明らかである。ここに「判断力批判」において展開される特殊的自然をも含めた経験全体を問題としなければならない。

二

カントは自然または世界全体を因果必然の法則にしたがって機械的に解明するのが妥当か、あるいは因果必然の法則すなわち因果律の極限として目的手段の關係を導入して説明すべきであるかという、いわば矛盾した問題を自然を現象 (Erscheinung) ——経験界——と物自体 (Ding an sich) ——可想界——とに分ける、いわば「批判により必然的に区別する」^⑧ ことによって、この二つの立場を共に同時に成り立たせている。

カントは「純粹理性批判」において、自然を機械觀的因果律にしたがって説明したのであるが物自体に関しては消極的な意味でもってしか説明しなかった。しかしカントの自然の理論的説明においては因果律と機械觀とは一致している。したがって、別種の自由な原因に基づく自然觀が成り立つ。ということは、「自然は自然科学の形而上学的原理によって組み立てられ、その反面「実践理性批判」における道德の目的觀の解明となつて別途の問題を展開せしめる」^⑨ ことを意味する。

ところで自然を一つの体系——全体——としてみることに、すなわち因果律の極限を予想する概念が「純粹理性批判」お

いて課題として提出せられ、それが理念として承認されていのであるが、そこにおいては理性は与えられた認識材料として知識を構成するのではなくて、課せられた問題として知識を統整する規則的な原理の能力となっている。すなわち、理性は悟性にある目標を与え、そして認識の体系的全体的統一を形成するのである。「悟性のすべての規則はこの目標を望み見て方向を指示する線に沿いつつ一点に合する。この点は虚焦点 (focus imaginarius) にすぎないが、一つの理念 (idee) である。理性はこれによって悟性概念に対して最大の拡張と統一を賦与することができる」^⑩のである。悟性は現象の結合すなわちそれによって自然成立の条件の系列が概念—カテゴリー—にしたがって何処にでも成立するような結合を行う。要するに悟性は部分的統一を与えるのであって、全体的すなわち体系的統一を与えるのではない。体系的統一は理性によって与えられるのである。つまり理性は理念によって集合的体系的統一を悟性に目標として設定するのである。したがってこの理性統一は常に一個の理念を前提しているのである。それは入認識全体の形式Vという理念である。この理念によって悟性認識の完全な統一が行われ、この統一によって、認識は単なる偶然的な集合物ではなくて必然的法則にしたがって連関する体系になりうるのである。理念は「対象に関する諸概念の完全な統一の概念」^⑪である。この理念すなわち理性概念は自然からは得られることはできない。むしろ理性はこの理念にしたがって自然を尋ねるのである。理性は「特殊を普遍から導き出す能力」^⑫であるが、対象とは直接関係するものではない。それは悟性と関係し、悟性を通して理性の経験的使用に関する、すなわち対象とは間接に関係するのみである。故に、理性は対象の概念を創り出すことはしない、ただ秩序づける、統一するということだけがその本来の働きである。悟性は直観における多様なものを概念によって結合するのであるが、理性は多様な概念を理念によって結

合するのである。これによってわれわれの悟性的認識は統一的認識になるのである。つまり悟性統一は直観の雑多な対象を概念—カテゴリー—をもって統一することであり、理性統一は多様な概念を理念をもって統一することなのである。これが理性の統整的使用 (der regulative Gebrauch der Vernunft) と称されるものである。カントはこの理性の統整的使用に関して二つの場合を挙げている。すなわち一つは理性の必然的使用 (der apodiktische Gebrauch der Vernunft) であり、もう一つは理性の仮言的使用 (der hypothetische Gebrauch der Vernunft) といわれるものである。前者は、普遍がすでにそれ自体確実で、かつ与えられている場合で普遍は包摂 (Subsumtion) の時には判断力を用いて特殊を必然的に規定する。この場合の判断力は規定的判断力であり、その包摂は「純粹理性批判」の図式論において明らかにされている。しかし後者においては普遍は蓋然的 (problematisch) にのみ想定されるような単なる理念である。つまりこの場合は特殊がある規則から由来したかのようにみられる。そしてその規則について吟味するのである。すなわち規則についての反省によってその規則の普遍性が論定されるのである。しかし自然における特殊は確実であるとはいえず、それは不定であるから實際想定された規則から生じながら、しかもこのような原則の普遍性を証明するようなすべての可能的結果をわれわれはどのようにして知ることができるであろうか。理性の仮言的使用というのは特殊なものの認識にできるだけ統一を与え、そして規則をできるだけ普遍性に近づけていくというのがその意味するところである。すなわち経験的規則をさらに普遍性または絶対性に近づけんとするのである。したがって理性の仮言的使用は悟性認識の体系的統一といういわば予定された統一を目指すことになるのである。例えば人間の心意識に感覚、意識、想像、記憶、知解、識別力、快、欲望などがあるように、同一の実体の現われであるとこ

るの種々な現象は一見するとそれぞれ著しく異なっていて、あるものから生じる結果と殆んど同数のものの存在を想定せざるをえない。このとき、論理的格律―主観的原理―は、その多様なものの差異を減少するように命ずる、つまり同一性を比較によって発見し、これらのもの間にある差異をできるだけへらすようにするわけである、そしてたがいに異なるように見える現象もこれこれと比較して、その結果これらの現象が根本において同一であるということになれば、そしてその確実性ははっきりするようになれば、そこに比較的―相対的―根源性を見出すことができる。そして、さらに相対的な根源性はまたたがいに比較され、やがては唯一の根本的な、すなわち絶対的な根源性へ達する。^⑮しかし、この絶対的な根源性は体系的表象の理念として課せられるもので実際に存在すると主張することはできない。何故ならばこの理性統一は論理的には仮言的なものにすぎないからである。この理性統一を前提とすることによって、われわれは経験によって与えられる種々な規則に対してある原理を設定することができるのである。

ところでこれらの理性使用は、カントが自己の哲学の体系的完結書として掲げた「判断力批判」の中で述べた判断力についての定義に相応する。すなわち「判断力一般は特殊を普遍のもとに含まれているものとして考える能力である。もし普遍（規則（Regel）、原理（Prinzip）、法則（Gesetz））が与えられていれば、判断力は特殊をこの普遍のもとに包摂する。この場合の判断力は規定的判断力（die bestimmende Urteilskraft）である。しかし特殊だけが与えられていて、判断力がこの特殊に対して普遍を見出すということになると判断力は反省的になる。すなわちこの場合の判断力は反省的判断力（die reflektierende Urteilskraft）である。」^⑯理性の必然的使用は規定的判断力に、理性の仮言的使用は反省的判断力に対応する。理性と判断力は、前者は、△原理の能力▽であり、△特殊を普遍から導

き出す能力Vであるに対して後者は入判定 (Beurteilen) の能力Vである。つまり一定の原理にしたがって判断する力である。

三

自然は、経験的認識の対象としては、悟性の超越論的概念 (transzendente Begriff) であるカテゴリー (Kategorie) — 普遍 — が時間の超越論的図式 (transzendente Schema) を媒介として直観の雑多 — 特殊 — を包摂し、これに概念的規定を与えることによって成り立つ。特殊を普遍に包摂するのは入規則の下に包摂する能力Vとしての判断力 (Urteilstkraft) である。そして普遍すなわち法則や規則や原理が与えられていれば、それは規定的判断力であり、特殊すなわち経験的諸法則のみが与えられている場合には、それは反省的判断力であるが、いづれも入特殊を普遍の下に含まれているVと考える能力である。

ところで、規定的判断力の場合、特殊を包摂するところの普遍はすでに確実に悟性によって必然的な超越論的法則 (notwendige transzendente Gesetze) が、この判断力にア・プリオリに指定されているのである。したがって、判断力はただ単に自然における特殊をその普遍の下に従属させればよいのである。つまり対象を規定するのである。しかし反省的判断力の場合は事情が違っている。すなわち、反省的判断力には特殊 — 経験的諸法則 — のみが与えられていてそれを包摂すべき普遍は与えられていないのである。したがって、この判断力は普遍を求めねばならない。そ

れはどのようにして求められるであろうか。それには、この判断力は対象を規定するのではなくて対象に関して反省しなければならない。反省 (Reflektieren) は「与えられた表象によって可能な概念に関して、この表象を他の認識能力―悟性あるいは理性―と比較するか、さもなければそれ自身の認識能力と比較するか、二つのうちのどちらかである。」^⑮そして反省においてもある原理 (Prinzip) を必要とするのである。その原理は規定的判断力の場合は、判断力の対象の根底に存する概念が規則を指定するのであるからこの概念が原理となるのである。しかし反省的判断力の場合は与えられた経験の特殊をもとにしてまだ与えられていない普遍的原理にのぼらなければならないのである。もともと原理はすべての経験の原理を、同じく経験的ではあるがしかし、いっそう高次の原理のもとに統一してこれらの原理相互の間に体系的従属関係を可能ならしめるものである。つまりある種の統一に従って、いいかえると、あたかもある悟性―われわれの悟性ではないにせよ―がわれわれの認識能力に引き合わせて考えてみると特殊な自然法則にしたがう経験の体系を可能ならしめるためにあらかじめ与えておいたものであるかのような統一にしたがってみなければならないということである。そしてこのような原理は理念としてしか考えられないものである。すなわちそれはわれわれの反省的判断力にのみ規定のためではなくて反省のための原理となるにすぎないのである。

四

「純粹理性批判」における経験のすべての対象の総括としての自然全体は悟性自身がア・プリオリに与えるところ

の超越論的法則 (transzendente Gesetze) にしたがうような体系を成すものである。しかし自然の諸形式は極めて多様であり、そこに純粹悟性がア・プリオリに与えるところの法則によっては規定されない多くの特殊の法則すなわち特殊な経験が取り残されている。したがって経験的法則も極めて多様である、同時にまたたがいに異種のなものである。そしてまたこの法則に適合する自然形式の多様性と異種性も無限である。したがって、知覚をその時々に見えられた特殊の自然法則にしたがって結合統一し、これを経験にすることは部分的には可能であろうが、一個の共通な原理のもとに統一することはまったく不可能であるといわざるをえない。またそれを為そうとしても結局手のほどこしような混沌とした集合を示すだけになってしまう。それ故に、ここに一つの超越論的な前提が必要となる。それは経験的法則とこれに適合する自然形式との無限な異種性は自然そのものに帰せられるのではなくてむしろ特殊の自然法則の間の親和性 (Affinität) にもとづいて、いっそう普遍的な経験的法則のもとに統一されるという手続きを重ね、こうしてついに一個の経験的体系を成すようになるという前提である。そしてこの前提は主観的には必然的なものと考えられなければならない。何故ならば、普遍的ならびに特殊の自然法則にしたがう経験は可能的な経験的認識の体系を形成しなければならないからである。それは自然における統一が現象の総括に含まれているすべてのものを残すことなく完全に結合するような原理にしたがうことを要求していることにはかならない。そしてこのことはまた判断力の前提でもある。判断力すなわち反省的判断力は経験的法則を結合するために絶えず経験的―特殊的なものから同じく経験的でありながらしかもいっそう普遍的なものに向って上昇していくのである。そしてこのような前提から判断力是一个の原理を確立するのである。すなわち、それは「自然は、われわれの判断力に適合するよ

うな論理的体系の形式にしたがって、普遍的自然法則を特殊化 (Spezifikation) して経験的法則にする^{①⑨}という自然の特殊化の法則 (Gesetz der Spezifikation der Natur) という判断力に特有な原理である。われわれは一般的法則 (形式的、普遍的) の面からしては経験の可能性の根拠に必然性が存することを知りうるけれども (カントが純粹理性批判において証明したように)、しかし特殊的法則 (内容的、特殊的) の面からしては如何にしてその可能性が必然的であるかは知ることができない。したがって特殊な経験的法則にもとづく自然の統一及び経験的法則体系としての経験の統一の可能性は偶然的であると考へざるをえない。しかし、経験的認識が一つの全体に組織的にまとまることができるとは、われわれはそのような統一を必然的に予想しなければならないのである。つまり、われわれの判断力はそれ自身の活動のア・プリオリの原理として特殊的自然法則においてわれわれ人間の洞察力―悟性―にとつては偶然的なるものも、なおわれわれには究明することはできないが、しかし考へられることはできるような法則的統一―その多様性が一つのそれ自ら可能的経験に結び合わされる場合の統一―を含むということを仮定するのである。すなわち、判断力―この判断力は将来に発見されるような可能的な法則のもとにおける事物に関しては反省的 (reflektierend) である―は「自然を、その経験的法則の点に関して、われわれの認識能力に対する合目的性 (Zweckmäßigkeit) の原理にしたがって」考へなければならぬのである。ここに自然の合目的性という概念が生じる。しかし、これによって自然形式そのものが合目的と考へられるのではない。そうではなくして、これら自然形式相互の關係と、その形式は極めて多様であるにもかかわらず経験的概念の論理的体系によく適合しているということだけが合目的と考へられるのである。かくして判断力は自然の可能性に対して、単に主観的立場においてア・プリ

オリの原理をもち、それによって自然の反省について一つの法則を与える。これをカントは「自然の特殊化の法則」と称しているのである。

五

自然におけるものをたがいに目的手段の關係に置いてみることを、現象の法則的全体としての自然の概念や、また何らの統一的結合をも示さない単なる経験からは説明しつくすことはできない。因果必然の法則すなわち因果律という一般的法則からは、ある特殊な現象がある法則にしたがっているということは偶然であるというよりほかないであろう。

さて、経験一般に関しては、原則として、普遍的必然的法則があり、特殊の経験に対しては特殊な経験的諸法則がある。そして後者の経験的諸法則に対しては自然は無限の多様性すなわち経験の無限の系列を示している。したがってわれわれの悟性認識においては偶然的なる経験的法則の可能性が考えられる。つまりわれわれは経験的諸法則にしたがう自然の統一と体系としての経験の可能性とを偶然的として判定するのである。もし経験的法則にしたがう自然の統一が可能でないならば、経験の一つの全体としての結合はありえないであろうし、特殊な経験は個々別々のままであろう。したがってここに特殊な経験を体系的に統一する原理が必要となるのである。これが統整的原理としての合目的性の原理Ⅴなのである。すなわち、「偶然的なるものの法則性」(Gesetzlichkeit des Zufälligen)^②が合目

的性 (Zweckmäßigkeit) なのである。つまりわれわれの自然——現象界——において偶然的なものと判定されるものは合目的性すなわち目的原因との関係を立てることによって合法的と見られうるのである。

さて、目的についてカントは次のように定義する。「そもそも目的とは何んであるかということを超越論の規定にしたがって——快の感情のような経験的なものを前提しないで——説明しようとすれば、目的 (Zweck) とはある概念が対象の原因——対象を可能ならしめる實在の根拠——と見なされる限りにおいて、このような概念の対象である。」^{②①}すなわち、概念が対象そのものを可能ならしめる根拠と見なされるところのものが目的である。要するに対象の概念がこの対象の現実性の根拠となるときこの概念が目的と称されるのである。そして、概念の対象に関していえば、その概念の原因性がすなわち合目的性 (forma finalis) ^{②②}なのである。

したがって、対象の認識ばかりでなく対象そのもの——対象の形式あるいは實在——がなんらかの結果として、結果の概念によつてのみ可能であると考えられるならば、われわれはそこにある目的を思いみるのである。そしてこの場合に結果の表象はその結果を生ぜしめる原因を規定する根拠となる。そして自然における物がたがい目的となり手段となるということ、またこのような物の可能性を目的の原因性によらなければ完全に理解することができないということになると、われわれはもはやその根拠を感覚的对象の総括としての自然という一般的概念のうちに見いだすことはできない。したがって、自然の合目的性という概念はア・プリオリ (a priori) ^{②③}であり、一個の特殊な概念である。そしてわれわれがたとえ自然の所産において自然がある目的と関係していることを認めるにせよ、そのような関係を自然の所産そのものに帰するわけにはいかない。したがって合目的性という概念の根源は判断力すなわち反省的判断

力のうちにのみ存するのである。つまりわれわれはこの概念を用いて自然における現象の結合——いかえれば、経験的自然法則にしたがって与えられているところの結合に関して自然の所産に反省をおこなうことができるだけである。故に、判断力——反省的判断力の原理は経験的法則一般にしたがう自然における物の形式に関するものとして、多様性をもつ∧自然の合目的性∨であるのである。要するに、自然はこの合目的性という概念によって、あたかもある種の悟性が多様な経験的自然法則——特殊——を統一する根拠を含んでいるかのように考えられるのである。自然の合目的性の原理は——多様な経験的法則における——一個の超越論的原理なのである。

ところで、カントは経験において与えられる対象について表象されうる客観的合目的性 (die objektive Zweckmäßigkeit) を形式的合目的性 (formale Zweckmäßigkeit) と実質的合目的性 (materiale Zweckmäßigkeit) に分け、^{②⑤} そうした後者をさらに外的合目的性 (äußere Zweckmäßigkeit) と内的合目的性 (innere Zweckmäßigkeit) に分類している。

形式的な客観的合目的性は幾何学的図形や数において示されるように「種々なそして無限に多様な——目的に役立つ——一種の客観的合目的性を明白に認識せしめるようなものである。」^{②⑥} このような合目的性は数学的図形の相対的完全性 (relative Vollkommenheit) と呼ばれ、一定の目的をその根拠に置くことなく、したがってまた目的論を必要としない合目的性として一般的に理解せられている。しかし、客観的合目的性は、もともと「対象の形式と物そのものの可能性との合致」であり、この場合その物の概念、すなわち物より前にあって物の形式の根拠を含むような概念にしたがうのである。実質的な客観的合目的性は、多様なものを一定の目的に関係させることによってのみ、それだから

また概念によって認識されるのである。例えば庭園において樹木、花壇、小径などの存在が秩序整然と配置されている様子をみると、われわれはこれらの物をわれわれ自身が任意な規則にしたがって囲んだ空間からア・プリオリに推論するわけにはいかない。物はすべて実際に存在している。したがってこれを認識するためには経験的に与えられなければならない、いいかえるとこれらの物は、われわれのうちにある単なる表象としてア・プリオリな原理にしたがって規定されてはいないのである。要するにこの合目的性は経験的合目的性 (empirische Zweckmäßigkeit) として一定の目的に依存しているのである。そして、さらにカントは目的との関係において結果を自然目的とみなすか、そうでなければ他の原因による合目的使用のための手段とみなすかによって、前者を内的―絶対的合目的性 (innere-absolute Zweckmäßigkeit) といい、後者を外的―相対的合目的性 (äußere-relative Zweckmäßigkeit) と称している。²⁷⁾ 前者は対象の完全性 (Vollkommenheit) であり、後者は対象の有用性 (Nützlichkeit) あるいは有益性 (Zuträglichkeit) である。「あるものは自然目的である」といわれるときと「あるものの存在は自然によって目的とされている」という場合、後者の場合は物の有用性すなわち他の物のうちに存在する目的との合致にのみ関係するものである。例えば、植物は草食動物のために存在し、草食動物は肉食動物のために存在し、肉食動物は人間のために存在するというような目的に対する手段という外的関係において手段の用をなすような合目的性である。この立場からはいくら自然を観察してもある一つの自然物が最後の目的であるということとはわからないのである。これに対し、前者の場合は物の完全性をその物自身のうちに存する目的にしたがって考察するものである。要するに、もし自然の結果を直接に技巧的所産 (technische Produkt) とみるならば、つまり他の物に対する関係から離れてそれ

自身を目的とみる場合である。例えば、樹木の繁殖においては自己を類 (Gattung) として産み出す。そして生長においては個体 (Individuum) としての自分自身を産出する。また部分の損失においては新しい部分で補われる、すなわち自己救済が行われる。つまりこの場合の目的原因と結果との関係は自分自身に対して原因でもあり、また結果でもあるという相互関係なのである。一般に目的とは、その概念が対象そのものを可能ならしめる根拠とみなされるようなものである。したがってある物における客観的合目的性を思いみるためには、前もって「それはもともとどのような物であるのか」ということ概念がくる。そしてこの物に含まれている多様なものと概念―この概念はこの物における多様なものを結合する規則を与える概念でもあるが―との一致はその物の質的完全性 (die qualitative Vollkommenheit) であり、これに反して量的完全性 (die quantitative Vollkommenheit) はある物がその物なりで完全であって何一つ欠けるところがないということである。つまり量的完全性は総体性 (Allheit) という単なる量概念にすぎない。

ところで因果的結合が悟性だけによって考えられる限り、すなわち判断の形式そのものとしてみた場合、その因果的結合は作用原因による結合 (nexus effectivus 機械的連関) であり、その結合は常に原因から結果へという、いわば一方的系列を成している。この系列においては、ある物―A―が結果となりその物に対して他の物―B―が原因である場合、この物―A―自身は原因として前提された物―B―に対して同時に原因となることはできない。これに対して理性概念―目的の概念―にしたがう因果的結合は究極原因による結合 (nexus finalis 目的論的連関) であり、その結合関係は相互的依存関係である、つまりいったんある物の結果であるとされたものでも同時にある物の原因と

もされることが可能なのである。このような連関は有機的存在者 (organisiertes Wesen) にのみ認められるものである。何故ならば有機的存在者は自然目的 (Naturzweck) として部分はその存在及び形式において全体によってのみ可能であり、各部分はたがいに原因であり結果であるからである。そしてこの有機性 (Organisation) が機械的自然法則すなわち因果律に対して偶然的に現われるのである。すなわちこの偶然性が自然目的すなわち有機性の仮定を要求するのである。このようにしてある自然の所産において、われわれが現象界—経験界—を超え出るならば、自然目的という概念は目的の法則にしたがった体系としての自然全体という理念へ導くのである。そして自然は、その形式の合目的性が自由の法則にしたがって自然において実現されるべき目的の可能と一致調和するというように考えられることができないなければならないならば、自然の根底に存する超感性的なものと自由概念が実践的なものとして含んでいるところのものとの統一の根拠が必ずなければならないであろう。たとえ超感性的なもの (das Übersinnliche) の概念が、理論的にも実践的にもその認識には達することができないにせよそれにもかかわらず感性的世界の原理にしたがう考え方から超感性的世界の原理にしたがう考え方への移り行きを可能ならしめなければならない。

注

- ① I. Kant: Kritik der reinen Vernunft A. 125
- ② ebenda, B. Vorrede XIII
- ③ ebenda, A. 111
- ④ ebenda, B. 165

カントにおける自然の客観的合目的性について

カントにおける自然の客観的合目的性について

三四六

⑤ カントは自然の合法則性を純粹自然法則あるいは普遍的自然法則と云っている。われわれは経験的・自然法則と純粹なる自然法則すなわち普遍的自然法則とを区別しなければならない。前者は必ず特殊的な知覚を予想しているが、後者は特殊な知覚にもとづくことなくただ知覚を一つの経験に必然的に統一する制約を含んでいる。そして後者に関しては自然と可能的経験とは全然一様 (einerlei) である。そして自然の合法則性は現象を一つの経験たらしめる必然的連結 (この必然的連結がなければわれわれは感性界の対象を全く認識することはできない)、すなわち悟性の根源的法則にもとづく (Prolegomena § 36)。^⑥ 可能的経験と自然とは同一であるから、したがって「可能的経験の原則は同時にア・プリオリに認識されうるものの自然の普遍的法則」 (Prolegomena § 23) である。

⑥ ebenda, B. 213

⑦ この点に関してはカントが「プロレゴメナ」の第十八節でべている経験判断と経験的判断の区別を参照。

⑧ ebenda, B. Vorrede XXVII

⑨ 桑木厳翼「カントの自然観」思想三十号

⑩ ebenda, Anhang zur transzendentalen Dialektik

⑪ ebenda, B. 672

⑫ ebenda, B. 673

⑬ ebenda, B. 674

⑭ ebenda, B. 674 f.

⑮ 特殊な自然法則はより一般的な自然法則にしたがうものであり、また原理の数の節約は理性の経済的法則であるばかりでなく、また自然の内的法則でもある。(ebenda, B. 678)

⑯ ⑰ I. Kant: Kritik der Urteilskraft, Einleitung IV, S. XXVI

⑱ ebenda, Erste Einleitung V

⑳ ebenda, Einleitung V, S. XXXIV

- ②① ebenda, § 76, S. 344
- ②② ebenda, § 10, S. 32
- ②③ ebenda, § 10, S. 32
- ②④ 物質は有機的組織をもつ限りにおいてのみ自然目的という概念を必然的にともなう、物質のかかる種別的形式が自然の所産にはかならない (ebenda, § 67, S. 300)
- ②⑤ ebenda, § 62 S. 271
- 形式的 (formal) とはその合目的性が対象そのものに関するのではなくて対象の統一をなす意識の作用に關することであり、実質的 (material) とは合目的性が主觀の意識作用に關せずして対象そのものに関することである。
- ②⑥ ebenda, § 62, S. 278
- ②⑦ ebenda § 15, S. 44; § 63, S. 280

